

家事調停のための現代家族論

A Study on Modern Families in the Context of Family Court Mediation

関 井 友 子*

Tomoko SEKII

要旨：本稿は家事調停の際に前提とされる現代家族像とその特徴を考察するものである。現代家族は核家族という形態を基本にし、その内部構造はジェンダーにより役割が配分され、その関係性において情緒性が希求されていると特徴づけられる。また、現代家族の2つの原則、愛情原則と自助原則は、家族は愛し合うがゆえに助け合わなければならない、という家族規範を顕在化させるものである。今後、これらの原則のありかたによって家族の多様化が一層進展するものとみられる。

キーワード：家族、家事調停、家族境界、愛情原則、自助原則

1. 家族研究からみる現代家族像

家族は、夫婦や親子といった関係から構成される社会の基礎単位である、あるいは休息・安らぎの場、情緒的な一体感を追及する場である、など様々な定義されている。一般的に家族は歴史的にも、どの社会にも、どの民族にも普遍的に存在するものであるとイメージされているのではないだろうか。いわゆる「核家普遍説」はマードックによって唱えられた学説である。父・母・子という単位がどの社会にも存在している。核家族こそが社会の基礎単位であるというものであるが、現在家族研究においては、家族の普遍的定義は不可能であるとされている。人類学の知見は、父・母・子という単位を捉えることのできない民族の存在を明らかにしている。

戦後家制度は否定され、新しい民法でモデルとされたのが「近代型小家族」である。また、産業革命によって出現した工業中心社会を近代社会と捉え、近代社会に適応的な家族として「近代家族」と命名し考察する研究者も多い。①核家族境界の成立。親族から、及び公共的領域から、境界を形成する。前近代社会は農業社会で生産と消費が一所で行われていたが、工業社会では職住分離の生活スタイルが形成され、家族など私的領域がプライバシー領域とされるようになった。また、移動に適したコンパクトな核家族が工業社会では適格とされ、親族関係から核家族境界を抽出していった。②性役割の確立。核家族内部では夫・父親である男性が公共的領域での生産活動を、妻・母である女性が私的領域を中心に家事育児に従事するという、性役割構造がジェンダーによって配分された。私的領域で家事育児を専門的に担う、専業主婦が誕生したのも近代

*せきい ともこ 文教大学人間科学部

社会の特徴である。③情緒性の強調。家族愛や母性愛などが必要であり、子どもの養育が家族の重要な役割だという規範が強調される。「子ども中心主義」ともいわれ、近代子ども観が基盤になっている。近代子ども観とは、子どもは純真・無垢な存在で、大人から保護され養育される存在であるという規範である。Ph.アリエスによれば、私たちが「子ども」と呼ぶ児童期は前近代社会では存在せず、幼児期を過ぎて自分で身の回りのことが出来るようになると、すぐに大人の世界へ入り、そこで労働に従事し、生活に必要な知識や情報、技術等を習得していったという。そこには我々が認識する子どもへの眼差し、子ども観は存在しなかった。彼は絵画分析を通じ、ルネサンス期以前に登場する背丈の小さな人が、大人と同じような顔つきで大人と同じ様なしぐさで描かれていることを明らかにした。“子ども”は「小さな大人」としてみなされ、“子ども”という存在は近代になって誕生した、とアリエスは主張する。現代でも子どもが労働から猶予され、教育される地域はいまだ限られたものである。

このように現代家族は、核家族という形態を基本にし、その内部構造はジェンダーにより役割が配分され、その関係性において情緒性が希求されていると特徴づけられる。

2 調査から捉える家族像

次に「家族とみなすかどうか」を（１）家族だと思う（２）どちらかという家族だと思う（３）どちらかという家族だと思わない（４）家族だと思わない、の４つの選択肢から一つ選び回答してもらった17項目の調査結果である¹⁾。

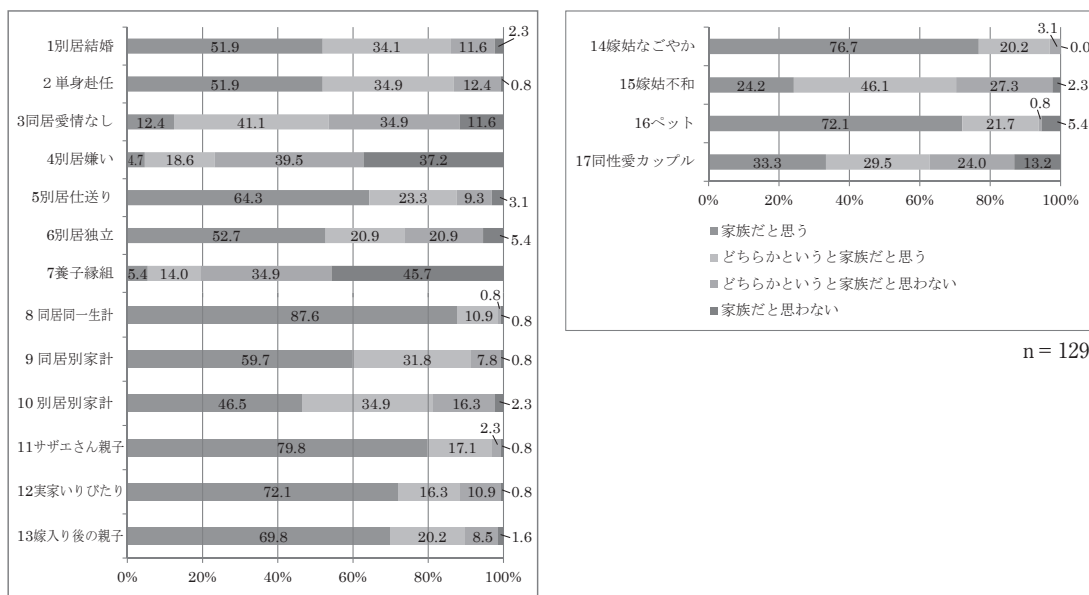


図1 家族境界調査結果

1から4までは、夫婦関係についての項目である。「1. 結婚してから別々に住居をもっているが、よく行き来する夫婦」「2. 単身赴任をして、ほとんど行き来がない夫婦」は80%以上が「家族である（家族だと思う＋どちらかという家族だと思う）」と回答している。同居が夫婦関係を規定する決定要因ではない。一方で「3. 一緒に生活しているけれども、愛情がまったく感

じられなくなった夫婦」が50%を少し超えるのに対し「4. 法的には夫婦でも、嫌になって別居している夫婦」は20%程度に「家族である」という回答は減少する。同居や生活の共同よりも「愛情」という要素が夫婦関係において重要視されている。

次に、5から7までは、未婚の親子関係である。「5. 未婚で別居しているが、親から仕送りを受けている子ども」を90%近くが家族だとみなしている、「6. 未婚で別居しており、仕事について親と独立の家計を営む子ども」は70%程度に減少する。さらに「7. 血のつながった親子だが、生まれてすぐ養子縁組をし、以後会っていない関係」は20%を切る率でしか家族として認知されていない。血縁関係において、それだけで無限定的に家族とするのではなく、交流や家計経済という実際に現実的な生活要素が家族関係に必要である。

8から10は既婚の息子と実親との関係への質問である。「8. 息子が結婚して同居し、一緒に生活しているときの息子と両親の関係」は98.5%が「9. 息子が結婚して同居しているが、食事や家計は親夫婦とも夫婦別になっている場合の息子と両親の関係」は91.5%、「10. 息子が別居している親夫婦、子ども夫婦の関係」は80%を少し超える程度に、家族として認知している。息子夫婦と親の同居は家制度において典型的な直系家族形態であり、いまだなじみ深い家族である。一方調停実務で前提とされる法的な解釈では、8から10の親子関係は別家族（世帯）とみなされる。この項目は、法と現実の乖離を示している典型的なものである。調停では当事者の家族認知と法的な家族境界のズレを利用して問題解決に利用することもあるかもしれない。例えば生活保護受給に際して、親と子の世帯分離（この場合は未婚の子ども）を促すことなども対処方法である。

11から13は既婚の娘と実親との関係項目である。「11. 娘が結婚し夫の姓に変わったが、娘夫婦と同居しているときの親と娘の関係」をイメージすると長谷川町子著『サザエさん』一家となるであろう。サザエさんと磯野浪平、フネさんの関係を96.9%が家族であるとみなしている。「サザエさん」に描かれる人間模様が人々にほのぼのとした印象を与えている結果かもしれないが、フグ田マスオさんの立場から捉えるとどうなるであろうか。無論、サザエさんはフグ田家の一員で、マスオさんタラちゃんが世帯員である。「12. 娘が結婚し夫の姓に変わり、別居しているが行き来のひんぱんな親と娘の関係」「13. 娘が結婚し夫の両親と住んでいる場合の親と娘との関係」は90%程度が家族だとみなしている。「実家に入りびたり」でも、いわゆる「嫁に出した娘」でも、娘との親子関係は拡大家族的な双系的認識であるのが現代の日本社会の特徴になるのかもしれない。

14と15は義理の親子関係でいわゆる嫁と舅・姑の関係である。「14. 夫の両親と同居し、なごやかに一緒に生活をしている嫁と夫の親」に対して「15. 夫の両親と同居しているが、お互いに不和な嫁と夫の親」と、「なごやかに」と「不和な」と関係性の違いを問うている。「なごやかな関係」は96.9%が家族とみなしているが、「不和」は70.3%と急減する。家族にとって情緒性が理念として捉えられていることを確認できる項目であろう。

最後に「16. 愛情をこめて育てているペット」は93.8%が家族と捉えている。家族と同様にかわいがっている「動物」への認識は、15歳未満の子ども数より飼育されているペットが多いという現状の反映なのかもしれない。これに対し、「17. 同居している同性愛のカップル」は60%強にしか家族という認知にならないという結果であった。2015年6月米国で同性婚が連邦最高裁判所で合憲とされ、日本でも東京都渋谷区をはじめとした、セクシュアル・マイノリティの人々に対する権利条例を定める動きなどが、今後この認知を変化させていくきっかけとなっていくこと

が予想される。

3. 現代家族の2つの原則

以上の調査結果から現代家族における基礎的、理念的要素を考察すると2つの原則を捉えることができる。

①愛情原則：家族における情緒性の重要性があげられるであろう。婚姻関係にあっても、生活の実態があっても、さらには対象が人間でなくても、愛情がなければ家族として捉えるのは難しい。このように考える人が多いといえる。愛情は家族関係をつくるうえで重要な要素とみなされている。家族は愛し合わなければならない、という原則となるであろう。現代家族の出発点である、夫婦関係は互いの愛情に基づく合意によって成立するとみなされている。恋愛結婚が見合い結婚に比べ優勢な昨今においては、このように人々から認識されている。愛情原則に基づき営まれる家族生活であるから、愛情の希薄化は関係性の終焉となり、また新しい関係性を模索することに躊躇する必要はないと、結婚と離婚を繰り返し、結婚した夫婦の半数が離婚する状況にあるアメリカ社会では「シリーズ結婚」が一般的な現象である。日本も3組に1組が離婚を経験する状況で、この原則の顕在化・強化が予想される。

②自助原則：同居や家計の共有など、生活の實際を家族境界とするものであり、従来から家族機能とされてきた、経済単位としての家族であり、家族は助け合わなければならない、がもう一つの原則である。社会保障が制度化される以前の社会では、家族が人々の生命を守り生活を支えるものであった。戦前の家制度の本質が、家の継承・連続性であったことは、家が人々の生活保障としての手段であったと捉えられる。家族は前近代社会で様々な機能を有してきたものが、社会の諸機関に移譲され、純化された要素が家族機能であるという学説もあるが、社会の諸機関にその機能を移譲してもなお費用負担、経済単位としての家族は現代社会においても生き続けている。しかし、「助け合う」自助の範囲は以前に比べると、縮小し、それが「家族境界」として今後どのように認知されていくかが焦点になってくる。子育ては依然として家族境界の範疇にあるが、介護は2000年から施行された介護保険制度により、家族から社会へという流れが今後益々定着されていくことが予想される。

愛し合うがゆえに支え合うことが家族であるという原則が、現代社会の家族規範として捉えることができる。何らかの理由で、家族相互の経済的な支え合いができない場合、つまり自助原則が遂行困難な場合は、現代社会はセーフティネットとしての支援施策が整えられつつあるが、愛情原則の希薄化や崩壊は外部や他者からの介入で回避できる性質のものと捉えることは難しいのが現状であろう。家族は公共的領域から区別され、プライバシー保護の観点からその介入に対して拒絶するからである。

愛情という目に見えない、捕まえて留めておくことのできない、曖昧で不安定な情緒性に基盤を置いているということが、現代家族の特徴である。家制度では家族は生産活動に結び付き、先祖代々・子々孫々継続され、その存在が前提とされるものに対して、現代家族は関係性の構築をしていかなければ存在できないものになった。なぜならば関係性はその関係者が関係の存在を確認できなければ成り立たないものだからである。一方的な思いだけでは関係は成立しえない。家族はそこにあるものではなく、常に意識的に関係性を確認し、つくりあげていかなければ維持できないものになったのである。

4. 家族のゆくえ

現代家族の2つの原則から家族のゆくえを予測する。まず①愛情原則と自助原則の強化・継続。これによって増加が予想されるのが、再婚家族である。ステップファミリー、例えば子連れの再婚の増加、再婚家族の再構築に伴う諸問題が増加することが予想される。また、現在の日本では異性間の婚姻のみ認められているが、将来的には同性間での婚姻もしくは異性間結婚と同じような権利が認められていくことが予想される。②愛情原則は保持されるのだが、自助原則が伴わないケース。夫婦ともに仕事を持ち、それぞれの仕事の関係で別居生活を営む家族。コミュータカップルとも言われる。ジェンダーによる役割分業が変化し、共働きの増加に伴い、このような形態の家族の増加が予想される。③愛情原則がなく、自助原則に基づく関係性が存在する可能性はどうだろうか。この形態は、シェアハウスやコレクティブハウスなどの現象が当てはまるのだろう。経済の低迷や所得格差が問題となっている現在、シェア経済といわれる、所有するのではなくシェア、共有する支え合いが注目されている。シェアハウスとは家族や恋人など特段親しい間柄でもない人たちが、住居を共有する形式であるが、若者が家賃や光熱費などを折半し、時にはコモンミールといった食事なども共有する暮らし方や、シングルマザーなどひとり親世帯と独居高齢者との同居などが進められている。④愛情原則、自助原則の両方がない形態は、単身世帯がこれに当たるのだろう。現在の日本で著しい増加を示しているのが、単身世帯である。配偶者を亡くした単身高齢者のみならず、推計では生涯未婚者が3割近くまで上昇することが予想されている。

最後に、家族とは誰なのか、という家族境界についてであるが、家族境界の縮小傾向が示唆される。核家族は核分裂を進めていくことも予想される。母子単位が事実上増加している国の存在も指摘されるなかで、家族境界をめぐるのは私たちがどのような選択を行って行くのが焦点になってくる。裁判所は調停などで原則面会交流を実施させるようになった。養育費の未払いが多い現状で、核家族境界を維持していくためには、養育費不払い時の対応についても法的措置などの言及が必要である。核家族の愛情原則を促す面会交流は、自助原則である経済単位としての要素を伴わなければ、有効に機能し得ない。

以上の考察からは家族の多様化という現象の一層の進展が予想される。法的にも現実的にも、調停で関わる家族の対応において、調停委員の持つ家族規範の柔軟性が一層求められていくことは間違いないだろう。

注

- 1) 調査は2012年10月に文教大学人間科学部現代家族論受講者の学生2～4年生129名を対象に実施された。

参考文献

- アリエス, Ph. (1980)『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房
- マードック, G.P (1978)『社会構造—核家族の社会人類学』内藤莞爾監訳、新泉社